

## 牛若奥州下り伝承

白方勝

牛若（義経没落後の奥州下りと区別して牛若と呼ぶ。ただし元服後は適宜義経の呼称も用いる）は、『義経記』等により鞍馬に入って遮那王と称していたが、金売り吉次に連れられて奥州藤原秀衡のもとへ下ったという説が一般に流布している。もちろんこれに疑義を挟む説もある。

『源平盛衰記』巻四十六には、十六歳になった遮那王はひそかに鞍馬を抜け出で金商人に具して関東に下り、伊勢義盛に馴れ、頼朝拳兵の時に従者を一人つけて貰い鎌倉に行き、頼朝との対面を果たさうという明確な意図をもって関東に潜伏し、その機会をねらっていたのである。『平家物語』巻十一の義経腰越状にも、京に入ること叶いがたく「身を在々所々にかくし、辺土遠国をすみかとして、土民百姓等に服せらる」と述べている。ここには奥州下りも秀衡の名も見えない。まさに遠国放浪説である。角川源義氏『源義経』（角川新書）は関東潜伏説に傾き、上横手雅敬氏『平家物語の虚構と真実・下』は関東放浪説をとっておられる。牛若はたして奥州に下ったのか否か、いずれにしてもそれは「歴史的事実」の探求ではなく、「伝承」の問題のようである。それにしてもま

だ検討する余地が残されているようなので、以下私見を述べてみたい。

### 一、牛若東下り

『平家物語』において義経が初めて登場するのは、義仲追討のための上京時であるが（『吾妻鏡』）においては養和元年十一月五日の維盛の平家軍防御のための出陣の記事）、それ以前の義経については次の二箇所の記事がある。

○奥州には、故左馬頭義朝が末子九郎冠者義経（巻四・源氏揃）

○一とせ平治の合戦に、父うたれてみなし子にてありしが、鞍馬の児として、後にはこがね商人の所従となり、糧料せをうて奥州へおちまどひし小冠者が事か（巻十一・継信最期）

右は覚一本であるが、八坂流系本、延慶本、長門本等も牛若奥州下りについては大差はない。頼政は義経奥州在住の上に立っての発言であるし、言葉戦いにおける盛嗣の悪口に対して義盛が反駁もしていないところを見ると、『平家物語』においては、牛若奥州下りは既定のことと見

ていた、あるいはその伝承を踏んでいると見てよいであろう。もちろん、それが史実であるというとは別である。次に『吾妻鏡』を引く。

成人の時に至りて、頻に会稽の思を催し、手自ら首服を加へ、秀衡の猛勢を待みて奥州に下向し、多年を歴るなり、

義経の参陣を頼朝がかつての新羅三郎義光の例を引いて感激したのに対して、兄の拳兵に應じて馳せ参じてきたまでの経過を語る一節である。

編者の説明ということになっているが、義経がそう語ったのであろう。義経が初めて歴史上に登場するのは、この黄瀬川の対面であるとの説もあるが、あまりにもよくできた両者の対応ぶりに、芝居がかつた作為を見て取ることもできよう。この黄瀬川の対面もまた事実ではないとの疑問も出てこよう（高田実氏。前掲『源義経』角川新書）。黄瀬川の対面が伝承だとすれば、義経の経歴も伝承の可能性が強いが、『吾妻鏡』も一応は牛若の奥州下りを既定の事実として扱っている。

以上は、主として登場人物のせりふや編者の説明として間接的に語られていた資料であるのに対し、牛若奥州下りを作品の中に初めて組み込んだのは『平治物語』である。『平治物語』古態本である学習院大学本を採用した新日本古典文学大系本によれば「牛若奥州下り」の一節があり、興味のある内容となっている。古態本とはいえ、この一節には『平家物語』の影響もあり、追補されたものという疑念は拭えないのであるが、それでもかなりの古態は存していると思われる。古活字本の「牛若奥州下り」はこの学習院本に拠っているが、室町期以後と思われる改変が多く見られる。そこでこの学習院本『平治物語』を中心にして牛若奥州下りを探ってみよう。

学習院本では、牛若はまず鞍馬を訪れた金商人に「ゆゝしき者を老人しりたり。金三十両、こふてとらせん」と持ちかけ、金商人は「うけ給はり候ぬと約束す」る。ところが「又、坂東武者の中に、陵助重頼と云

者」が鞍馬に参った時、この男が源頼政と親しい仲であったと知り、自分の素性を明かし、関東へ連れ下れと頼み「さうけ給り候ひぬと契約してけり」とある。牛若は鞍馬脱出を二人の男に「約束」「契約」しており、まずは重頼とともにその居住地下総国へ下っている。途中北条で頼朝に対面しようとしたが、重頼が、父は見参しているが自分は「いまだ見参にいらざ」と言うので、一旦下総へ下り、その後伊豆へ越えて頼朝に対面を果たす。頼朝に佐藤の尼公を紹介されて赴き、継信・忠信を郎等とした後、「多賀の国府へうち越て、鞍馬にて契約しける商人に尋逢て」秀衡に対面の労をとらせるのである。

ここで問題になるのが金商人と重頼と二人と交わした「約束」「契約」である。最初金商人との「約束」は奥州まで連れ下ることであったと思われたが、実際には多賀から平泉までの僅かな距離であったことが後になってわかる。しかもこの金商人は直接に秀衡とは関係がないのであるから、ただその間の案内役を勤めただけである。それなら金商人の二度の登場は不必要と思われる。伊豆から多賀までは案内なしに一人で行っているから、まして平泉までその旅を延ばせないことはない。秀衡との対面の労を取らせたというので、牛若は「今度義経を扶持して候金商人」と言って砂金三十両を貰ってやっているが、多賀からの「扶持」であれば、砂金三十両（金額の換算はさて置き）は多すぎよう。「義経を扶持して候」には全行程の意味がこめられてはいないか。とすれば明らかに金商人との「約束」に対するその後の義経の行動は極めて不自然と言わざるをえない。

学習院本ではこのように牛若と金商人・重頼との「約束」「契約」の内容が極めて不明瞭である。牛若は鞍馬を早く脱出したいために、金商人との「約束」の日を待ちきれないで、重頼に従ったのであろうか。いづれにしても牛若は二重契約を交わしていることになる。この疑問は早

くから意識されていたようで、古活字本では牛若は重頼に「御辺具して、まづ下総まで下り給へ。それより吉次を具して、奥へとをり侍らん」と言っている。これならすっきりするわけであるが、『平家物語』諸本等に見た奥州まで連れるという金商人の役割がこれまた極めて薄くなることも否めない。古活字本の合理化は単に筋の上の取り繕いに過ぎず、「約束」についての本質的なところは何も解消できていない。

『義経記』における牛若奥州下りは、その途中のこととして「義経陵が館焼き給ふ事」なる一節を設けている。九歳の時に鞍馬へ来た陵の兵衛が牛若を見て自分を頼れと言ったを思い出し、奥州へ下るよりも陵を頼ろうと思ひ、吉次には、下野の室八嶋に待てと別れ、陵の兵衛を訪ねるが、不精なる返事にその館を焼いて立ち去る。次の「伊勢三郎義経の臣下にはじめて成る事」では上野国で無理に宿を乞うた女の夫が伊勢三郎でこれを家来とし、阿津賀志の中山で吉次に追い着き、伊勢三郎を上野に返し、吉次に伴われて奥州に下っていく。

以上『義経記』は吉次伝承で一貫させて、その間に陵の兵衛・伊勢三郎の伝承をなймаぜたのである。『平治物語』を用いてそれを改変したのか、異伝承に拠ったのかは俄かに判定できないが、『平治物語』古活字本よりは話の筋を通してある。特に陵の兵衛の牛若に対する態度は逆であるが、奥州下りの筋に組み込むためにはこの方がよい。

古活字本や『義経記』の筋建てに比較してみると、学習院本の構成は破綻していると言わなければならない。金商人との「約束」は奥州下りであり、その「契約」が多賀からの道案内になったのは、いうまでもなくその間に重頼との東下りが入ったためである。つまり学習院本は二つの伝承を緋い混ぜたためたための無理を取り繕いえないままの形態を残したと思われる。そこに学習院本の古態を見ることができようか。さらに言えば、当時から牛若の鞍馬脱出後の動静については金商人との奥州下

りと陵重頼との東下り（関東潜伏説となる）の二説があったということになる。『吾妻鏡』は奥州下り説のみを採ったのである。

## 二、黄瀬川参陣

『源平盛衰記』と学習院本とは関東潜伏説にも立つ伝承であるが、共通するのは関東にいる間に頼朝に対面しに向向している点である。それが関東潜伏説の肝心な趣向であるように思われる。それを果たすための役割を伊勢三郎に担わせるか、源氏の旧臣にするか、伝承の世界ではその他にもさまざまあつてよいわけである。

さらに頼朝対面を果たしたこの伝承では「黄瀬川の対面」は不要となる。『源平盛衰記』は頼朝挙兵後の対面となつてはいるが、まず鎌倉に義盛から付けて貰った藤太を遣り、その後には赴いている。放浪人義経の慎重な、順序を踏んでの対面である。

学習院本は奥州下り説を主軸としているので、黄瀬川参陣の場を仕組んでいるが、ここにも関東潜伏説を緋い混ぜたための無理が生じている。関東での頼朝対面は、筋の展開上からは義経を佐藤の尼公に紹介する役目だけで、対面そのものの意義は少ない。次の頼朝挙兵の章の黄瀬川参陣で再び頼朝対面が繰り返されるわけで、そこに重点を置こうとしたのである。対面の場で頼朝が「是ほど成人するまで、見ざりける事よ」と言っているのは、五年ぶりの対面としては言い過ぎで、初めて対面したとの感を与える。対面の感激性を盛り上げるためかもしれないが、新大系本注でもこれを不自然としている。この不自然は、単なる筆の滑りではなく、重頼を頼つての関東潜伏説を忘れて、奥州下り説に帰り、対面の場面にしたために生じたものである。さらに、頼朝は昔を思い出し、後三年の合戦での義光のことを話して感動しているが、それは文辞まで

『吾妻鏡』によく似ている。

義経奥州出立にも疑問がある。学習院本では秀衡は義経に鎧・太刀は与えたが、兵を与えたとは記されていない。義経が召し連れたのは、佐藤の弟・吉次こと窪弥太郎、途中から伊勢三郎である。「那須の湯もうで」と偽って白河関を通っているから、そう偽れる人数は主従三人と見てよい。それが頼朝対面の場となると、「其勢八百騎ばかり」となっている。これを秀衡が付けた軍勢とすれば、前の記述と矛盾する。

以上のように見ると、学習院本における疑問点はすべて頼朝対面の場にある。この場合は『吾妻鏡』等によって後補されたか、その文辞によって改変されたものであろう。「故伊与守入道、二度、生かへり給へる心ちこそすれ」と修飾を加えている点からも逆ではないであろう。

『吾妻鏡』の黄瀬川対面が劇的に構成されていることは既に述べた。『平家物語』延慶本の黄瀬川対面も『吾妻鏡』によった改変であることは言うまでもない。参陣を富士川合戦の前にするなど手が加えてある。

学習院本はさまざまな矛盾を犯しながら、本来なら黄瀬川の対面を否定する関東潜伏説伝承までを緋い混ぜながら黄瀬川参陣を構成したが、それは黄瀬川参陣は伝承であることを自ら証明したことにほかならない。『吾妻鏡』の黄瀬川参陣が伝承だとしたら、義経経歴の記事もまた伝承であるということになる。黄瀬川参陣も奥州下りもどちらも伝承である。奥州下りの過程には『平家物語』『平治物語』ともに「金商人」という以外に具体的な伝承がないが、それだけに伝承自体の弱さがあり、『平治物語』学習院本の作者（追補者）も、関東潜伏説の伝承を挟んだのであろう。

以上、牛若奥州下り・関東潜伏説ともに伝承であることを述べたが、伝承であるかぎり、どちらに事実があるのかという問題ではなくなる。どちらかに事実があるかも知れないし、ないかも知れない。

### 三、金売り吉次

牛若を奥州へ連れ下った金商人は一般に「金売り吉次」と呼ばれているが、この呼称は比較的新しいように思われる。そこでまず、手許にある資料から煩を厭わずその呼称を列挙してみよう。

- 1 こがね商人 『平家物語』覚一本（大系本）
- 2 金商人カ所従コサンナレ 其後金商人粮料背負テ（ふりがななし） 『平家物語』八坂流・両足院本
- 3 こかねあき人 『平家物語』百二十句本（古典文庫）
- 4 こがねあきんどの従となアテ、 『平家物語』前田流譜本
- 5 金商人の所従となつて 『平家物語』波多野流平曲譜本
- 6 三条の橘次ト云シ金商人（ふりがななし） 『平家物語』延慶本
- 7 金商人が従者にて、（ふりがななし） 『平家物語』長門本（国書刊行会）
- 8 かねあきうど 天草本『平家物語』
- 9 金商人 『源平盛衰記』（古活字本・国民文庫）
- 10 金商人ニ具シテ 『源平盛衰記』今治市河野美術館蔵・版本
- 11 金あき人 『源平盛衰記』今治市河野美術館蔵・横中版本・宝永四年刊
- 12 金商人・金商人 『平治物語』学習院本（新大系本）
- 13 金商人（三例ともふりがななし） 『平治物語』松平文庫本（和田英道氏翻刻）
- 14 こがねあき人 『平治物語』彰考館・京師本（汲古書院）
- 15 奥州の金商人吉次といふ者 『平治物語』古活字（大系本）
- 16 金商人吉次ト云フ者

『平治物語』今治市河野美術館蔵・版本三冊

17 奥州の金あき人吉次・こかね商人 『平治物語』(写本)

『新板平治物語』(絵入り・明暦二年刊)今治市河野美術館蔵

18 金あき人・こかねあきんと

『平治物語』今治市河野美術館蔵・江戸期写本

19 三条の金あきんどの吉次殿よ 幸若『くらま出』

20 吉次信高 幸若『烏帽子折』

21 三条の吉次信高 謡曲『烏帽子折』

22 そのころ三てうに、大ふくちやうしやあり。なをはきちむねたか  
とそ申けり。まいねんあふしうにくたり、こかねあき人となりける

か、 『義経双紙』

23 かねあき人・こかねあき人 『義経記』(大系本)

24 かねあき人・金をあきなひて 『義経記』今治市河野美術館蔵。絵入り板本

25 金商人・金をあきなひて 『義経記』今治市河野美術館蔵・新板絵入・版本

26 きちむねたか・こかねあき人 『判官物語』橋健二氏蔵(影印)

27 三条の町こかねあき人きち次末はる 『義経記』芳野本(影印)

右によれば、まずは「吉次」という名を出すか出さなかで二分される。名を出さない場合はさらに「かね商人」と「こかね商人」となる。「金商人」と書かれ、振り仮名がなく、どちらとも区別のつかない用例もあるが、「こかね」と読む例の方が多くであろう。

「吉次」という名がいつから出てきたかは明確にしえないが、『平家物語』延慶本に見える「橋似」とあるのが初出と見てよいであろう。「こかね」からの連想で「吉事」の意を込めて命名されたものと見れば、「橋次」は当て字となるであろう。室町期になると御伽草子・幸若・謡曲・

『平治物語』古活字本等みな吉次となり、「信高」「宗高」、時に27のように「末はる」の名が見える。これが正式の名として付けられたのだとすれば、「吉次」は通称か。または「三条の吉次」で屋号のように解してもよい。「名」そのものが成長していく。さらに幸若や『浄瑠璃物語』では吉六・吉内といった弟たちも登場する。ただ、この一覧を見ると、我々が呼びなれている「金売り吉次」の見当たらないことに気付く。これは牛若奥州下り伝承から派生した、もしくはつくられた伝承である。いわゆる『浄瑠璃物語』の中の『しやうるり御せん物語』に「かねうりきちしのふたか」(森武之助氏『浄瑠璃物語研究』所収)『浄瑠璃十二段草子』(古活字本)に「金売吉次信高」とある。

「吉次」が牛若奥州下り伝承の最初から登場していたのではなく、「延慶」つまり鎌倉末期、それよりあまり溯らない時期からの登場とすれば、「橋次」「吉次」の名を記さない諸本は古い伝承に拠っているということになる。

次に「かね商人」と「こかね商人」の関係であるが、両者が同意かという点、少々やっかいである。「かね」は黄金も鉄をも意味する。柳田国男は「金売り」について、始めは古金商い、鋳物屋の意に解し、後には、炭焼小五郎伝承と結び付いて黄金商いで長者になったという伝承のあることに注目して、黄金商いに解している。「かね売り」には卑俗な語感があるが、その同義語の「かね商人」ともども元は鉄商いの可能性が強い。網野善彦氏は『日本中世の民衆像』(岩波新書)において平安末期から中世にかけての鉄の商いや鋳物師の横行を指摘されている。鉄の輸送は海路によったであろうから、奥州下りをする吉次をそのまま金(鉄)商人とすることはできないであろうが、金(鉄)商いで儲けた資本で奥州交易を始めたものと見ればよい。柳田の解釈はそのまま「かね商人」と「こかね商人」の順序に当て嵌めてもよいのではないかとはい

うことで、以上の呼称を順序立ててみると、「かね商人↓こがね商人↓吉次↓吉次信高（宗高）↓かね売り吉次」となるであろう。

ただこの順序を諸本の順序と考えるには危険性がある。『平家物語』は「こがね」で江戸期の板本の『源平盛衰記』は「かね」である。学習院本や『義経記』は「かね商人」と「こがね商人」を混用している。混用のうちどちらが本来の用法であったかは、『平治物語』古態本の松平文庫本にも「金」に振り仮名がなく、さらに筆写の時期や筆写者の問題もあり、単純に伝承のままの言葉とは決められない。その点は諸本全体について言えることである。

ただ先に金の意について見たように「かね商人」とあるのが「こがね商人」よりも古い伝承によっていると思われる。学習院本の牛若奥州下りの一章はある時期の追補であるとしても、次章で見られるように、他にも古い姿を残す伝承に拠っているとと思われるので、「かね商人」の記述は古い姿を残したものと見たい。従って『源平盛衰記』の関東潜伏説も古態を残すものと考えられる。そこで以上のことを考慮しながら、学習院本について吉次（以下、便宜的にこの呼称を用いる）の原像を探ってみよう。学習院本での吉次は次のようになっている。

(1) 吉次は毎年奥州へ下るかね商人であって、必ずしも奥州の人間ではない。

(2) 牛若の方から奥州下りを頼んだのであって、吉次、ましてや秀衡が奥州下りを誘ったのではない。吉次もこの児を牛若と知らない。

(3) 吉次は秀衡を直接知らない。

右の三点が『義経記』で代表される通説と異なっているが、(1)については、既に『平治物語』古活字本が「奥州の金商人吉次」と変えている。吉次が奥州の人とすれば、その居所を「三条」と記す諸本は、吉次の都での邸宅と見ていると解してよいであろう。16等は産をなした吉

次が都に定住した後の設定とみてもよいであろう。

学習院本には「京より下度毎に、湯巻・薫物など、とり下ける得意の女房」とあるので、吉次が商っていたのは、こうした都の優雅な品物を奥州に運んで交易することで、黄金の商いではなかったと思われる。最初は古金商いをしていた吉次が、少しばかり溜めた金で奥州との交易を始めたのであろう。そのあたりが吉次の原像と思われる。もちろんこの交易の代価は黄金であって差し支えない。こうして吉次は次第に「こがね商人」になり、三条に大邸宅を構える大福長者になったのであろう。他の用例を合わせ読めば、そういう吉次の成長の過程が読み取れる。なお角川源義氏前掲書では隅田川伝承との関連から吉次に商人の面影を見ておられる。吉次を実在した奥州交易の者どもに置き換えると、交易のかたわら人買いをした商人たちの性格も垣間見ることができようか。

吉次自身「児拘引」と疑われることを心配している。

(2) については基本的に幸若『くらま出』と一致する。学習院本を具体化すれば幸若のようになるであろう。吉次が「常に鞍馬へまい」ったのは、幸若に「千五百里の道の間を。安穩に守り給へと。ふかくきせいを申さるゝ」とあるように、商いの奥州下りの旅の安全祈願のためであり、この段階では牛若とは未知の間柄である。牛若は、よくやって来る吉次と僧との話に出て来た奥州の長者秀衡の話に聞き耳を立てていたのであり、「吉次とふかく約束をめされ」るのである。これは学習院本の「約束す」と言葉も一致している。幸若が学習院本を具体化したのか、逆に幸若を学習院本が簡略化したのかはしばらく措くとしても、この両者が同じ伝承に立っていることは認められるであろう。とすれば学習院本で牛若が「ゆゝしき者を壺人しりたり」と言うのは、この者が秀衡であることは言うまでもない。それは後に吉次に「秀衡が館へ、われ具してゆけ」と言っており、吉次への礼物として「約束」通り砂金を貰って

やっているのでも明らかである。あえて「ゆゝしき者」と言っていて、その名を表さなかったのは、直接秀衡を知らない自分の立場を有利に運ぶためであろう。しかし、その何の関係もない秀衡に「金三十兩」を貰ってやるなどと約束するのはとんでもないことであるが、稚児で鞍馬へ入った時も、坊主の禅林坊に、本尊の毘沙門天の太刀を自分にくれなどと常識外れのことを言っているのと同じ牛若の性格が出ていよう。要は、そこに切なる牛若の奥州下りへの意志を見ることが出来る。

さらに吉次は牛若と知って連れ下ったのではないように読み取れる。後にの秀衡対面の場でも、秀衡が「いかなる人にておはす」と問うているのは、吉次が仲介した時に牛若と紹介しなかったことを示している。それ故の「約束」「契約」であろう。『平家物語』でも「所従」「糧料せをうて」とあるのは、義経と知らなかったための使役であろう。幸若『烏帽子折』でも牛若と知らず、元服後は「京藤太」と名づけて使っている。この点でも学習院本と幸若は共通の伝承に立っていることがわかるが、以上のように読めば、学習院本には一つの意図による人物像の形成があり、単なる伝承の簡略化とは思われない。とすれば幸若は他にも趣向を加えているので、鞍馬の吉次の奥州語りも後に手が加った趣向と見てよいではなからうか。

(3) 秀衡対面に当たって、牛若は吉次の商人の「いづくへも推参」できる立場を利用した。これも吉次との「契約」のうちであろうが、ここに十六歳とは思われない牛若の世知にたけた性格を見ることが出来る。吉次はさらに女房を利用したが、都から持参した品物で釣ったのである。吉次が直接秀衡に対面したかどうかは明確ではない。ただ、牛若は礼物として砂金三十兩を貰ってやっている。ここで牛若は吉次を「義経を扶持して候金商人」と言っているが、それがこの吉次にふさわしくないことは、交易の内容を見てもわかる。学習院本の筆写の頃には、既

に都での吉次伝承は「こがね商人」であったとすれば、その影響による混同であると解したい。ただそう解釈するためには、秀衡の言葉も問題になる。学習院本が砂金を「是にしかじ」と言っていて与えているのに対し、古活字本はこのあたりを簡略化して参考にならないが、松平文庫本等他の諸本は「金商人ならば是にしかじ」となって、金商人だから金がよいとしているからである。しかしこれが身分不相応な三十兩の砂金を合理化するための語呂合わせであることはすぐ理解できよう。学習院本の場合は、礼物としては砂金にしくものはないとの単純な意に解釈できる。

吉次はまだ秀衡に直接対面できないような小商人であり、三十兩の砂金は初めからの「約束」である。文句を言わずにあっさり出した秀衡に、奥州の王者らしい風格が窺われようというものである。吉次は秀衡に貰ったこの三十兩の砂金で一躍大商人になったとの想像もできよう。とすれば、学習院本の方が本来の姿で、松平文庫本は追補であると見てよい。次の頼朝拳兵の章でも、「金商人」とあるが、同じ理由で後の読み方が混入したものと見ておく。ただ、ここでは吉次は「元は公家の青侍」であったが「金商人」になり、義経に付いて再び「侍になされ」「窪弥太郎」と名乗り、義経の供をしたとある。古活字本では「堀弥太郎と申は、金商人也」とある。弥太郎ということ、不詳の人物よりも、名ある堀弥太郎に変えたのであろう。いわば吉次の素性の後日譚として語られているわけであるが、特に郎等の少ない義経に配慮したのであろう。旧臣が主に巡り会って仕えるという趣向は室町期以後の語り物、浄瑠璃等によく見られる。とってつけたような不自然な趣向であり、後の義経伝承では捨てられている。この頼朝拳兵の一節は全体的に後の伝承による要素が多い章で、これも後補と見たい。

以上、学習院本の吉次は「こがね商人」として活躍するような人物ではない、それ以前の面影を宿している人物として描かれている。牛若は

まずそのような男に頼ったのである。

#### 四、『平治物語』の義経像の検討

『平治物語』学習院本に描かれた義経像を、他の伝承とも比較しながら、義経の原像とその意義について触れてみよう。

(1) 謀反への意志 牛若が稚児として鞍馬寺へ入ったのは、兄のように「学文し、出家」するためである。ところが十一歳ともなった牛若は「家々の系図を覚えて、諸道の日記」を見て、源氏の直系を自覚し「父義朝の本望を達せん」と思う。この点、幸若『未来記』では「天下をおさめん其ために。兵法けいこのたしなみなり」と冒頭部にあり、そこに至る決意は語られていない。『義経記』では鎌田正清の子正近の「しやうもん坊」が牛若に近づき、源氏の系図を語り唆してから変心する。これらに対し、学習院本では牛若自身の主体的な自覚によっている。この方が少年の孤独な心とけなげさと、そして、未恐ろしさを思わせる。その自覚が毘沙門天の太刀の要求となる。模造品を造って本物の方をくれと言うのは、突飛な常識はずれのことを言っているようであるが、子供ながらに自分を毘沙門天と同じ位置に置いているわけで、そこに牛若の常人ならぬ能力と気概が示されていると言えよう。驚きあわて拒否した師の禅林坊は、その牛若を理解できていない。牛若の子供ながらの主体的な自覚と、異常な能力・気概とは、学習院本（松平文庫本）のみが捉えている。

(2) 橋弁慶・鞍馬天狗 牛若は隣の坊の児と都に出て「辻冠者原のあつまりたるを、小太刀・打刀などにて、きりたり追たりしけり。追もはやく逃もはやく、築地・端板を躍越るも相違なし」と敏捷さを発揮する。『源平盛衰記』に「学文などせんと云事なし。只武勇を好て、弓箭、太

刀、刀、飛越、力態などして、谷峰を走、児共若輩招集て、暮雙六隙なかりければ」とあるのと共通した伝承である。常人ならぬ牛若の能力ははやここに現れている。御伽草子『橋弁慶』の千人斬りの伝承はここから発展したものである。千人斬りとは物騒な話であるが、戦乱・飢饉等で大勢の死骸が賀茂川に捨てられ山積みされていたという背景を考えると、さほど突飛な話でもないことになる。

また、「僧正が谷にて、天狗・化の住と云もおそろしげもなく、夜な／＼越て、貴布禰へ詣けり」とあるのは、平家追討を祈願したのであるが、ただそれだけでは物足りなさもある。そこで「天狗」が登場する。松平文庫本では既に「僧正か谷にて天狗はけ物のなん所へよなく／＼行て兵法をならひ」となっている。これはやはり謡曲『鞍馬天狗』とともに、「天狗化の住」というのを活用したところから発展したの伝承であろう。辻冠者を相手の立ち回りはまさに「凡夫にはあらず」の感であるが、いわばその異常な能力だけが書かれてあり、そこに至る過程を説明する伝承がいるわけで、それが『鞍馬天狗』であり、その能力を証明する伝承が『橋弁慶』なのである。古活字本が「ひるは終日に学問を事とし、夜は終夜武芸を稽古せられたり。僧正が谷にて、天狗と夜々兵法をならふち云々」とあるのは、むしろ『鞍馬天狗』から影響された叙述であろう。

辻冠者原斬りは道徳的には褒められたことではないが、どうせ彼らも京の街のあぶれ者、困り者たちであろう。牛若と同じようなことをしていた連中であり、いつの時代にもそういう連中はおり、彼らの起こす喧嘩沙汰、殺傷事件は絶え間なかったであろう。そうした世相の反映が牛若の辻冠者ばら斬りにあると見れなくもない。辻冠者原退治ともなれば、むしろ好感をもつての伝承であるかもしれない。

(3) 出家の拒否 ここまで来ると、牛若自身にはもはや出家への道は



なくなっているが、出家させることが牛若の命を助ける道であることに変わりはない。出家を勧める師の坊に、頼朝のことを言うのはよいとしても、「しいて剃れと云ものあらば、ねらひて突きころさん」となると穏やかではない。さらに「げにも人突よげなる児の眼ぎはなり」というのは（古活字本では落としている）、断固とした出家拒否という以上に、「突よげなる」にはもつと好戦的な目付きを感じるであろう。「辻冠者原」を相手に斬り回った牛若がここにもある。牛若は本能的に戦闘的な性格と能力をそなえていたと読み取れる。

(4) 鞍馬出 前章で考察したので省略する。ただ、学習院本では、牛若が吉次を頼むについては、秀衡が牛若を所望したのではなく、吉次に頼んだのではなく、ましてや義経・秀衡の間に暗々の密約があったのではなく、両者が知り合った仲でもなく、積極的に牛若が秀衡を当てにしたのでもないことだけを確認しておればよい。『吾妻鏡』の「秀衡の猛勢を待みて」を鞍馬出の時とすれば、少なくともこの時にはそういう状態ではなかったと言える。幸若『くらま出』にはその意が出ているが、学習院本をそのまま読むかぎりそこまでは言えない。始めの頃の伝承には『義経記』等の秀衡の義経歓待という筋書はなかったと見てよい。

また、学習院本では重頼が連れ下るのであるが、重頼が「児拘引」とて、とがめられ」ようと心配するのに対し、「此わらは失せて候へばとて。誰かとがめ申べき」云々と涙ぐむ孤独な牛若を描いている。これが古活字本でもその旨のことは吉次に言っている。これが幸若等での平家の児に対して、牛若一人源氏の児であるという設定に発展することになるのである。直接本論には関係ないが、「児拘引」には男色にかかわる児のかどわかしのあった社会背景が窺われる。

(5) 牛若元服 牛若の元服が近江国の鏡の宿で、烏帽子親を頼まず一人で元服し、「源九郎義経」と名乗ったことは、以後の資料においても

共通している。伝承の世界においてはあろうが、牛若・遮那王と呼ばれたいたのが、歴史上に登場する源九郎義経となるには、どうしてもこの元服の過程が必要なのであろう。しかし、牛若はなぜ烏帽子親なしの元服をしたのか。いたしかたない状況とはいえず、最後の手段として重頼を頼むこともできたはずであるが、それを無視しての元服は、牛若のただおのれ一人を持しての自立であることを意味する。(1) で見た源氏直系の自覚がここに生きている。烏帽子親なしの元服は、孤立無援、おのれの道を行く牛若にこそふさわしい。この元服には謡曲・幸若等にみる余計な趣向は不要である。

謡曲『烏帽子折』幸若『烏帽子折』では、烏帽子の源氏の左折り、平家の右折りが問題となり、さらに烏帽子屋の亭主の妻が鎌田正清の妹であるという趣向が加わる。元服自体の趣向はおもしろくなるが、それで牛若の性格が発展しているというものでもない。幸若では、元服の動機として、平家方の武者が鞍馬から抜け出した児を探し回っているのを姿を変えたとしている。説明としては納得できても、これでは他動的な動機が加わってくることになりかねない。

学習院本では単純であるが、この要点は押さえてある。烏帽子は持参していたのであり、松平文庫本によると、刀も日頃武勇をしていた時のものを懐にし、烏帽子も「ざれて着ける」ものとしている。烏帽子を武勇するために用いることはないから、松平本の方が妥当であろうが、これによれば、牛若は出家を拒否した時から機会があれば元服しようとの意志を示していたことになる。刀を持って下るのは当然のことで、それを懐に入れていたのは、まだ児でもあったからであろう。元服でほかにも足りないのは弓矢と馬である。重頼が弓矢を与え「馬は御心のまゝに」と言う、「道すがら撰びのり」「馳挽」「物射ならふてぞ下りれる」とある。さすがに鞍馬では弓馬は習えなかつたのであるが、それを道す

から鍛えたのである。そこに義経の積極果敢な性格を見ることができ、ここで注意したいのは馬を「道すがら撰びのり」である。道のほとりに野良馬がたくさん居るはずはなし、「撰び」とあるからには良馬であろうが、それをただ呉れる人もいないであろう。とすれば、これは海道を往来する者の乗った馬の中から良馬を撰び、奪ったということにはかならない。かつて毘沙門天の太刀を乞うた、とんでもないことをする牛若がここにも居る。古活字本がこのあたりのことを簡略にしてしまったのは、既にある『烏帽子折』にそれを譲ったからであろうか。

(6) 関東潜伏 この件についても既に述べたので繰り返さないが、学習院本ではこの間の動静として大男の盗人を捕らえ、六人の強盗団を切り伏せた話を載せる。この馬盗人には弁慶の面影をかいま見ることができようし、強盗団六人の切り伏せは後に謡曲『熊坂』、幸若『山中常盤』の伝承に展開することになるのであろう。牛若の性格としては(2)の辻冠者を相手にした敏捷手練が発揮された話となっている。伊勢三郎は関東での郎等であること、特に強盗としていないこと、鎌倉参陣まで素性を明かさなない点など、学習院本と『源平盛衰記』は共通する要素を持っている。

(7) 佐藤の尼公・兄弟 頼朝対面後義経は、元服したことが頼朝の迷惑となつては困るからと「なを人のしらぬ国へ落下りて」と言わせて、佐藤尼公・兄弟の話に直結している。それは最初吉次と交わした奥州下りの筋とは合致しない。また、頼朝がなぜ佐藤尼公を「大切に思ふべき者」とするのも十分に明確ではなく、このあたり脱文のある箇所もあるのである(松平文庫本もほぼ同文である)。尼公は義経に対し常に頼朝との関係でものを言っており、よほど親しい関係があると思われる。あるいは尼公は義朝が健在の時頼朝と許婚の約束をしたとも読めるところである。つまりこの話は、義経は頼朝を介して佐藤兄弟を郎等に

することを語る伝承なのである。これらのことを考えると、この佐藤兄弟の話は、奥州下りよりも、関東潜伏説に付随した伝承ということになる。つまり佐藤兄弟は『吾妻鏡』が言うように秀衡が付けた郎等ではなく、頼義・頼家以来の奥州戦役で築いた地盤から育った郎等という解釈に立った伝承なのである。

(8) 秀衡入り 義経が秀衡に招かれたのではなく、ましてや吉次が秀衡を頼めと案内したのでもなく、義経の方から頼み込んだのでもないことは、今までのいきさつからも、またこの一段からも明らかである。義経にとって秀衡は未知のひとであれば、秀衡もまたしかりである。義経の秀衡対面は全くの推参である。義経を平泉まで案内した吉次も秀衡には親しくなく、「得意の女房」を使って対面の労をとったのである。従って、秀衡も好意を見せながらも義経に対して積極的に庇護しようとはしていない。

秀衡は対面した男が誰であるかも知らない。吉次は義経と知らないから、秀衡にそれと紹介できていないのである。秀衡は義経が、義朝の末子と名乗りで初めて知る。ただ元服の情報は既に秀衡に届いていたのであり、そこに秀衡の勢力の大きさを知ることができると同時に、元服により平家に謀反の意を明らかにした義経の噂は広まっていたのである。秀衡はその義経を「くせ人」ととらえている。いわゆる一癖ある男との見立てである。謀反の意はともかく、常識破りのことをするとんでもない男であり、また自主性の強い見所ある男との両面をこめての「くせ人」であろう。この義経に対し秀衡は、庇護もしない代りに、自分の領内で自由に暮らせと言う。それが平家にも配慮し、少なくとも間接的に義経を庇護する妥当な処置と言えるのである。しかし、養子・婿にとるものもいるであろうからと言うのは、ことによれば土着せよというに等しい言い方であり、「御所存を心得候へば」が義経の謀反心を察した

ものであれば、矛盾した言い方になる。矛盾しないとすれば、謀反心を捨ててここに土着せよ、それが御身の「始終の為」ということになる。とすればそれは決して「末たのもしげ」な言い方ではない。義経は身の保証をしてくれるだけで「末たのもしげ」と思ったのではなからう。初めて義経に対面した秀衡の心はまだ定まっていなかったに違いなく、義経がそれを「末たのもしげ」と思ったのは義経の積極的な姿勢と見るべきであろう。それはその後の義経の行動を見れば理解されよう。

秀衡が「いかならん人をも頼み給へ」と言ったのは、養子・婿にもとられよとのことであつたが、義経はおとなくそうはしないで、関東にまで足を延ばして秩父・足利等、源氏・平氏を問わず近づき、所領を奪い力を付けたいと思ひ、松井田では面魂を見て平家追討の旗頭にしようと思つている。このあたりは関東潜伏とともに腰越状の「辺土遠国をすみかとして、土民百姓等に服任せらるる」に当たる。義経は、秀衡が「御所存を心得候へば」と言ったことで、秀衡を理解者と思ひ、「いかならん人をも頼み給へ」を自分なりに解釈して勝手な行動をとつている。それを許す秀衡の言葉は「末たのもしげ」ということになる。自己本位と言へば言えるが、すべてを自分の有利に解して積極的に出ようとする義経の性格がそこにある。

御伽草子『秀衡入』なる一編がある（有朋堂文庫『御伽草子』）。ここでも義経自身は秀衡を知らず推参すること、吉次に謝礼を貰つてやること等が学習院本と共通する。前者は、牛飼童に館を聞き、霧の法を使って侵入し、人々を無視して上座に着くこと、風呂に入つていた秀衡はそれと察し、義経を鄭重にもてなすこと、後者は、義経が吉次を呼び出し、三条の過失をあげながらも、仇に恩をもって報うという点が異つてゐる。御伽草子らしい表現・文体をもつてゐるが、吉次の三条の過失を見ると、いわゆる『浄瑠璃物語』の一節の性格があり、それ以後の成立

と見てよい。義経の向う意気の強い、自分勝手な性格も『平治物語』と共通しており、『平治物語』を受け継いでいると言えよう。

(9) 義経の容貌 この件については『平家物語』巻十一の盛嗣の「九郎は色しろう、せいちいさきが、向か齒のことにさしいでて、しるかななるぞ」とあるのがよく知られてゐる。「色しろう」は、鍛えられていない、女性的な印象を与える。これが後に容顔美麗な義経に発展するのであろう。「せいちいさき」も武士としては見栄えがしないであらう。「向か齒」はもちろんである。これに対し学習院本は佐藤尼公の言葉として「故左馬頭殿を、おさなき目にも、よき男かなと見奉しが、似わろくこそおはすれ共、其御子かともおぼゆる」とある。具体的な容貌は記していないが、父の義朝は美男であり、義経は父に似てはいるが、不男で、義朝の子とかと疑われるほどだと、大差を付けてゐる。しかし、秀衡は逆に「みめよき冠者殿なれば、婿にとる人も有べし」と賞めて言つてゐる。この矛盾は、尼公と秀衡の立場の違いとも考えられようが、やはり伝承の違いと見るのがよいであらう。つまりここでも学習院本は、「佐藤尼公」（関東潜伏説）と「秀衡入」（奥州下り説）と、本来別の伝承が組み合わされたものであることがわかる。

## 五、伝承の義経像

以上、『平治物語』学習院本の牛若奥州下り伝承は、後の幸若・『義経記』等の説話の原拠たる要素を備えてゐるとともに、かなり古態であることがわかる。従つてここに描かれた義経の性格は義経伝承の基本となると考えられる。そこで牛若の性格をまとめてみると、容貌はともかく、断固として己を貫いていく積極性、常識破りの行動の中に平家討滅への秘められた意志等、一貫した性格で統一されている。当時の物語の

人物像としては希有なことである。しかし、それは『平治物語』の単独の成果ではない。義経のこの人間像は、ひろく義経伝承の中で形成されてきたものである。

『玉葉』の筆者九条兼実が義経を「武勇と仁義」の人と評したのはよく知られている。これを『平家物語』に当て嵌めると「武勇となさけの人」と言った方がふさわしい。小松茂人氏は「けなげ」と「なさけ」とされている（『軍記物語の研究』）。『平治物語』には「なさけ」の面はみえないから、これは『平家物語』が義経を理想化する過程で付与した性格であろう。そこで「武勇」の面で『平治物語』と共通する点を上げてみると、まず一の谷の坂落しがある。「老馬」の暗い一の谷への道で「例の大だい松はいかに」と言っているが、民家を焼くのは東国武士の戦法であるにしろ、道案内のために焼くのは常識はずれの、人のことを何とも思わない性格が出ている。また鷲尾の説明にも「さては馬場ござむなれ。鹿のかよはう所を馬のかよはぬ様やある」と言っているところにも、断固として意志を貫いていく実行力を感じる。「逆櫓」でも梶原に対する態度はもちろんであるが、船を出さないと言う水主梶取に「舟つかまつらずは、一々にしやつばら射ころせ」と下知する。これは特に出家を拒否した時の牛若の態度に通じるであろう。大人になった義経には「人突よげなる」目はなかつたであろうが、相手を倒してまでおのれの意志を貫こうとしている。「那須与一」においても、辞退する与一に対し、「義経が命をそむくべからず」と断固として言い渡している。扇的は平家にとって扇的は遊びであろうが、義経はこれも戦の一つと見ている。それは兎の時に辻冠者原を相手にしてもそれが遊びでなかったのと同じである。また牛若の敏捷さは「能登殿最期」で教経に狙われ、「みかたの船の二丈ばかりのいたりけるに」とある「はやわざ」も、塀を飛び越えた敏捷さがものをいったものである。

以上は『平治物語』を基にした性格、あるいは共通する性格であり、後の幸若・謡曲・『義経記』等においても同じ性格を見ることができ。平家討滅の物語の英雄義経はかくあるべきものとの造型である。その原像は既に『平治物語』にあるが、それは伝承の中で形成されていったものでもある。

さらに一つ付け加えれば、牛若奥州下りの伝承は、貴種流離のロマン的な思いを誘うに十分な物語であるにかかわらず、色めいた話がない。牛若の性格形成においても「武勇」に傾きすぎた感は否めない。そこで「なさけ」を「恋」に置き換えて、「平家をやつして」（『色道大鏡』）つくれたのが『浄瑠璃物語』である。『伊勢物語』に倣っての元服直後の恋物語である。ここから近世への道が開かれていく。

以上手元の資料で、研究史を無視して私見のみを述べた。

（一九九四年四月二十八日受理）